

徳島の百人

(昭和四十三年十月二十三日発行)

徳島市中央公民館)

チャールズ・A・ローガン

出身地 アメリカ、ケンタッキー州シェルビビル

生年月日 一八七四年十一月十一日

没年月日 一九五五年六月三十日

南部かたぎ

ローガンは、アメリカ南部ケンタッキー州の片田舎シェルビビルに生まれている。実家は製粉工場を経営していた。古い家柄で、新教徒だったらしい。彼の徳島での伝導資金も実家からの援助がかなりあったといわれる。だから彼は南部びいきで、独立戦争については常に南部を弁護し、奴隷問題についても「普通の歴史教科書に書かれた如きものではない。」とよくいつていたという。(岡博「ローガン先生の人と信仰」)

「あたたかく上品で、聖者ふうの風ぼうだったが、一面剛気で感情の振幅が大きく、行動的で、信念については絶対に妥協せず、大声で何時間も論争を続けるところもあった」(古角勝小松島教会牧師)

徳島の農村における彼の伝道ぶりは、そのあたたかい思いやりや実際家的な一面を語るとともに、心から農民を理解しえた南部開拓農民の子孫としての伝統を思わせるものがあった。

一粒の麦

一八九九年、同州ルイスビルとプリンストン神学校を卒業、同年二十五歳でパティプレイン・マヤスと結婚、ジャクソン市で牧師生活を三年間送った。―これが来日前の彼の経歴である。

ローガン夫妻が米南部長老派教会派遣の宣教師として徳島市に来たのは明治三十五年、二十八歳のときであった。その二年ほど前に、妻の弟であるハリー・H・マヤスが来県、徳島本町三丁目の宣教師館(現キリスト教センター)で伝道を始めていた。徳島にキリスト教が本格的に根を下ろすのはこの二人の伝道によってだったといってもよい。夫妻は徳島市寺島本町の宣教師館(現、徳バス寺島車庫付近)に住み、通町三丁目に建設した日本基督教会徳島教会(昭和二十九年大道に移転)を根拠地とし、マヤスとともに伝道を開始、昭和十二年六十三歳で徳島市を去るまで三十五年間も在住した。彼ほど親しまれた宣教師はなく、彼の住居付近は「ローガン」小路と呼ばれたほどで、徳島のキリスト教はローガンと同義語となり、精神的にも文化的にも市民に与えた影響は少なくなかった。

行動的聖者

彼が来住したときは、日露戦争の二年前だが、徳島はまだ辺地、明治維新の残影は濃く「チョンマゲの老人が一部には残ってましてネ、初めて見たときはピストルを頭にの

せてるように思いました」と彼は後年古角に語っている。彼はまず日本語を修得するため、旧制徳島中学の教諭を招いて猛勉強するかたわら、徳島県地図を離さず、地名はもとより人口にいたるまでこくめいに暗記し、教会建設の具体的構想を描いた。後年流ちょうな日本語で、徳島県に対する具体的な把握ぶりを日本人牧師に披露しては驚かせたという。理想家であるとともに実家で、自転車さえ珍しかった時代に、母国から取り寄せた自転車にモーターを取りつけたり、後年はフォードを買ったりして県下をくまなく伝道にかけまわり、祖谷奥地にまで靴に縄をまいてわけ入ったという。どんな階級の人たちをも愛し、浮浪者を見つけては自宅に連れて帰って世話をしたので、しばしばこんな連中でいっぱいになり、夫妻のものを持ち逃げされたことさえあったが、彼は「キリスト教とは損をすることです。」と笑っていたという。

賀川との出会い

賀川豊彦に与えた影響はあまりにも有名だが、終生、賀川の恩師、援助者となったのはむしろ義弟のマヤス博士だったようだ。マヤスはオランダ系の米人で、バージニア州レキシントン出身、実家は代々金物商で、初代のニューヨーク市長まで出した家柄だ。温和な学者タイプだったようで、マヤスは少年時代の賀川を自宅に引き取ってまで世話をし、洗礼を受けさせ、結核療養中には賀川と床を共にしてまで看病し、神学校へも入れ、社会運動の資金的援助を続け、後年には賀川の農民運動にまで参加している。(横山春一「賀川豊彦伝」)賀川がローガンの「創生記」の講義を通じてまずキリスト教にふれたのは事実だが、ローガンに対してはむしろその人格と生活の中に伝道者としての理想像を見出し、底辺の庶民への伝道の精神や方法を受けついでといつてよい。

平和主義者

彼の著書や教会での説教には絶対平和主義の気迫がみなぎっていた。日中戦争前から日本の中国政策を批判し、その軍国主義を憂い、「キリストの弟子たるものはピストルを投げ棄て、ドスを海中に投じ、ただ神の近衛兵になれば十分のはずだ」と説き続けた。(岡、前掲書)こんなわけだから自宅にはたびたび特高が調べに来たこともある(古角)という。反戦思想は徹底していて、聖書の解釈でもヤコブや使徒ペテロの暴力を批判し、またイスラエル民衆の史詩「詩篇一四九篇六節」の好戦主義をあやまった受国心と断じ「三千年の歴史の中で国家に進歩があったろうか、すべての国民も、そして教会すらもしばしばこうした憎むべき迷いをしたことがある。」と戦争を肯定した教会の歴史そのものにも厳しい反省を行なわずにはいられなかった。歴史に対する造詣も深く「人間の作る歴史は勝手なものであります……。」とねじまげて書かれた世界各国の歴史の例をあげ、「私も人間はウソが好きで、わが国の本当のことを知る勇氣がありません。」(ローガン「詩篇の靈歌」)と書き、暗に戦前の日本のあやまった愛国心や皇国史をも批判している。

日本を愛しぬいて

彼は大正七年に神学博士となったが、夫人は昭和三年徳島で死去、同十一年にバージ

ニア州出身のブラウンと六十二歳で再婚。同十六年、日米関係が険悪となつてから帰国した。戦後二十六年八月、賀川豊彦に招かれて来日したときはすでに七十七歳だったが、全国各地を約半年間にわたつて巡回伝道、夢にまで見た徳島市でも一週間過ごしている。帰国四年後の昭和三十年、テネシー州のナッシュビルで八十歳の生涯を終えたが、日本を再訪することができないのを覚悟していたらしく、「日本を去るに臨んで」との講演で「日本の前途は輝かしい。もしも日本が戦争を回避しうるなら、日本は世界の諸国に恩恵を施せる富める国となる。労働者の月給は三万円になり、皆自己の家屋を所有するに至り、自家用の自動車を持ち、子供たちは大学教育を受けるようになる」と語った。（岡、前掲書）戦後間もないころの彼らしい実際的な予言ではあった。それは表面的に当たったという人もある。はたしてそうであろうか。徳島市民は日本が戦争に巻き込まれそうになったとき、彼のこの「遺言」だけは永遠に思い出すべきではなからうか。

（岸 積）

徳島キリスト教センター

